

先に述べたるが如く古代人は、世界には見ゆる部分と見えざる部分とありて見えざる部分の象徴たる神こそ全體の主なりとせり。されば見ゆる部分に屬する人間も全體の支配者たる神の意思に従はざるべからず。この宇宙觀は東西を問はず廣く支持せられたり。然るに近代に至り、見ゆる部分の觀察に基礎を置く自然科学興り驚異なる成功を見るに及び、見ゆる部分こそ世界の全てにして見えざるものは非存在として扱ふこと可なりとする見解生ず。ここに見ゆ、見えずとは表象的謂ひにして觀察の可否を意味す。觀察は五感中にも優れて視覺に依存するものなればかかる表現を用ゐるなり。現象の觀察を裝置、論理操作によりて補ふ技術の進歩によりてこの見解は人心を捉へぬ。望遠鏡、顯微鏡、高速度撮影、電磁技術などの發達はそれまで謎とせられしもののヴェールを次々に剥ぎ取りぬ。科學は見ゆるものをその對象と爲すものなれば見えざるものの存在を云々するは非科學的となす考へは今や主流と言ふべし。衰へたりとはいへ未だキリスト教の影響強き歐米は兎も角、わが國においては知識人の壓倒的多數はかかる考へを有す。

かかる立場に立つ人はその有する説明體系にて説明すること能はざる現象はその存在自體を否定す。氣のエネルギーもその一例なり。氣のエネルギーを用ゐてスプーンを曲ぐることは事實可能なれど彼らは頑なにこれを認めず。自己の説明體系に合はざればなり。野外授業にて「先生、あの鳥間違つてる」と訴ふる生徒あり。根據は圖鑑に見出すこと得ざる故なり。スプーン曲げを否認する人はこの小學生と何等變るところなし。

佛道修行は言葉を変ふれば見えざる世界に分け入ることなり。所謂科學的なる人々の眞つ向から否定する次元に分け入ることなり。單にかかる次元を認知するに留まらず、更に進んで操作することすら含む。

昨今の宇宙物理學の發展により、宇宙の萬有引力の法則に従はざること判明せり。唯一可能なる説明は觀測不能即ち不可視の存在を假定することと言ふ。その存在たるや實に全宇宙の八十七パーセントに及ぶ。この存在を名づけて暗黒物質と爲す。この暗黒物質、現代科學の最大の謎の一なり。

思ふに佛道修行を究めたる者、暗黒物質の探求に必ずや大なる貢獻をなすべし。